

夏目漱石『行人』研究

— お直を中心に —

博士前期課程二年 胡
娟

目次

序章

第一章 女達の共通点と相違点

第一節 お直との共通点

第二節 お直との相違点

第二章 お直の内面と主体性

第一節 お直の内面

第二節 お直の主体性

第三章 お直の存在

終章

注

参考文献目録

⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
28	25	23	18	15	10	10	7	2	2	1	

30
字
×
40
行

漱石文学に登場してくるおもな女性たちとして『草枕』の那美、『虞美人草』の藤尾、『三四郎』の美禰子、『それから』の三千代、『彼岸過迄』の千代子、『行人』のお直、『道草』のお住、『明暗』のお延などには、個性的でユニークなそれぞれの造形が見られる。彼女らに共通して言える性格は、「自己本位」ということである(注1)。常に主人公の身近にいて彼らに何らかの影響を与え、ひいては一篇の主題において重要な意味を持つ。これらの魅力ある女性たちの力強い存在は、はたして漱石文学の中でどのような動きをしているのであろう。

『行人』について、小宮豊隆氏がつとに漱石の書簡や日記などを通じて、一郎の体験を通して、漱石自身の弧高の正しさや寒さを叫んだのだと述べている(注2)。その後は、一郎の苦悩や、二郎と直の関係についての研究が多い。また、瀬沼茂樹氏は、近代知識人の典型としての漱石の不安や絶望、孤独を究明しようとした(注3)。伊豆利彦氏、重松泰雄氏は、主に二郎と直の間に本当の愛情が存在しているかどうかについて論じている(注4)。近年の研究では、時代背景を重視し、近代的な恋愛、結婚と家族問題をテーマにしたしながら、社会学、女性学、およびジェンダーの理念を駆使した読み方が多い。三浦雅士氏は、「小説の結構から見れば、『行人』が扱わなければならなかったのはむしろ家族制度の軌轢であって、現代文明の不安ではない」と指摘している(注5)。

以上の先行研究に共通しているのは、いずれも一郎を始めとする男たちが語りの中心になっていることだ。それは、後半部「塵労」のHさんの手紙が伝える一郎の哲学的思念にとらわれ、一郎の常軌を逸するような言動も故無きことではないと考え、『行人』は一郎の近代知識人としての自我の猛威の前に挫折を余儀なくされる「男の物語」として読んでしまうからである。

その一方で、女達には言説の明かりが十分与えられてこなかったと言えよう。『行人』の作品世界で周縁的な位置に置かれている女達は、結局研究者たちの言説の中でも、周縁的な位置を甘受しなればならなかった。しかし、『行人』に内包されている女性像は実は豊かであり、検証の余地は十分にあると思う。少なくとも「塵労」の途中、Hさんの手紙が紹介されるまでの「直」は一郎の虚妄めいた疑念、奇矯な言動に対峙するような存在としてあるのではないかと思われる。「直」に限らず、『行人』に登場する女達のありようは、それぞれに男たちの、あるいはその社会制度の中にあって、その結びつきの矛盾点をリアルに浮かび上がらせる存在として存在しているのではないだろうか。そこで、本研究では『行人』の女性達、主にお直を

中心に焦点を当ててみたい。

第一章 女達の共通点と相違点

漱石は人生における様々な問題を論ずる上において、常に人間関係、その中でも特に男女の関係のうちに生ずる葛藤を追究してやまなかつたことは既に周知のことである。そのためにも彼の問題とする男性像に匹敵するほどの大きな存在の意味を持つ女性の創造が必要となったのである。しかし、これらの女性たちが実際のどのような描かれているかという問題について、私はこの章で、お直を中心とした女性の表現の方法、お直と他の女性との関係などを考えてみよう。

第一節 お直との共通点

お直は『行人』の世界を「淋しい秋草のやうに其処らを動いてゐる」(「帰ってから」四)る。お直は九箇所で「淋しい」(注6)の語りで形容されるが、そのいずれの時も「笑い」が奇妙に符合している。「淋しい」笑いがお直の人物像の一面を成していることは考えられる。

思えば漱石作品には、女の「淋しい」笑いの系譜とでもいうべき一つの流れがある。『行人』においてもお直の外に「友達」に登場する「あの女」(十八)、「娘さん」(三十二)、「帰ってから」で父が話す「女景清の逸話」(十三)に登場する盲目の「女」も「淋しい」笑いを浮かべている。

「あの女」は二度、その頬に「淋しい」笑いを寄せる。いずれも三沢(「友達」四)の口を通して語られる。三沢と初めて出会った宴会の夜に「御前も何処か悪いのか」と聞かれ、「あの女」は「淋しそうな笑ひを見せて、暑い所為か食欲がちつとも進まないで困つてゐる」(同二十)と答える。彼女はこの時、自身の胃病に気付いてはいるがどうすることもできないでいた。今一度は、三沢との別れの場面で浮かべる。「あの女は今夜僕の東京へ帰る事を知つて、笑ひながら御気嫌ようと云つた。僕は其淋しい笑を、今夜何だか汽車の中で夢に見さうだ」(同三十一)と三沢は思う。

盲目の「女」は、昔別れた男の一番上の子の歳を聞いて「黙つたなり頻りに指を折つて何か勘定」(「帰ってから」十七)する。そして「結構で御座います」(同)と一口言つて「後は淋しく笑つた」(同)。その男はこの「女」と別れる時、「僕は少し学問する積だから三十五、六にならなければ妻帯しない。で已を得ず此間の約束は取消にしてもらうんだつてね」(同十五)と言つていた。しかし勘定してみると、

恐らく男の妻帯したのは三十五、六の前だったのである。そして、その時、彼女の「淋しい笑い」は、「泣かれるよりも、怒られるよりも変な感じ」（「帰ってから」七）を父に与えたというのだから、その笑いの中にはかなり意味深いものが潜んでいたと考えられる。

また、彼女らの他にも、「あの女」に「よく似て居る」（「友達」三十三）という「精神に異状を呈し」た「娘さん」（「友達」三十二）は、注目に値する人物だろう。なぜなら、夫に仕えていた頃の「娘さん」は、「淋しくつて堪らな」（「友達」三十三）だったのであり、「我慢」（同）していたとはいふものの、微笑んでみればその類に、無意識のうちに淋しい翳が見え隠れしてしまっていたことは、想像するに難くないからである。

この三人の女、そして他作品で「淋しい」笑い（注7）を浮かべる女達に共通してみられる感情の一つは、一人の淋しさである。それは孤独だと判然とは自覚されない、もの淋しさといった朧な感情である。今一つは、そうして自分を一人取り残していく周りの状況、極言すれば運命への締めめ感情である。漱石作品の中では、自らの手で自身の道を切り拓いていこうと考えられる女『虞美人草』の藤尾や『明暗』のお延が「淋しい」笑いを洩らさないのは、このことの逆接的な証となる（注7）。「淋しい」笑いとは、自身の内なる感情と隠そうとして笑ってみせながら、結局隠しきれずにしまった笑いを指すのだろう。内なる感情を「淋しい」笑いで覆わねばならない状況こそ、本当に「淋しい」ものといわなくてはならないはずである。

では、これらの「笑い」に何かしら意味合いの含まれた笑いであろう。特に「淋しい笑い」について、お直を九箇所に渡って描写され、それも、和歌山での一夜の後、お直と一郎の間に重苦しい空気が漂う、「兄」四十から「帰ってから」四の場面で、頻繁に現れるのである。「淋しい笑い」は、お直を探るための、一つの鍵になっているといえよう。

お直の「淋しい」笑いには、まず運命に対する諦めの感情が読みとれる。

「何うせ妾が斯んな馬鹿に生れたんだから仕方がないわ。いくら何うしたつて為るやうに為るより外に道はないんだから、さう思つて諦らめてゐれば夫迄よ」

彼女は初めから運命なら畏れないといふ宗教心を、自分一人で持つて生れた女らしかった。其代り他の運命も畏れないといふ性質にも見えた。

運命を「畏れない」ということは、裏返せば運命なら締めるともとれる。「仕方がないわ」と諦め易いお直は、物事の選択を迫られる際も、「妾は何うでも構ひません」(「兄」十六)「何うでも好いわ」(同二十六)などと片の付かない返事をするばかりで、よりよい生き方をしようとする努力を初手から放棄する。「妾馬鹿で気が付かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるかも知れないけれど」(同三十一)と、周囲の自分に対する評価をよく知りながら、「是で全く出来る夫の事を兄さんに対してゐる気なんですから」(同)と言ひ、「さう気を腐らせないで、もう少し積極的にしたら何うです」(同)と二郎に勧められても「私は是で満足です。是で沢山です」(同)と、お直にとつても窮屈であるはずの現在の状態をそのまま放り出している。運命への諦めと同意であると思われる人生をよりよく生きたいという情熱の無さが、お直には窺われる。それは「冷淡」の一語が、作中人物お直に最も多く用いられていることにも現れているだろう。

周囲の評価にも、一郎の態度にも自身を変えることなく、運命に身を任すという選択をしているかに見える点は、二郎の持つ「囚はれない自由な女」(今迄の行動は何物にも拘泥しない天真の発現に過ぎなかつた)「(塵勞」六)という感懐の通りである。しかし、「天真の発現」であるはずのお直の言動には、人間が遍く持つであろう生の希望が此から見出されない。天真の発現に生の希望が見出されないということはお直が人間として生きる場所を失いかけている、ということだろう。お直は、和歌山での夜、初めて一つの希望を二郎に告げる。だがそれは「猛烈で一息な死に方がしたい」(「兄」三十七)という死の希望なのである。「首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工」よりも「大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方」(同)を選ぶお直の選択は、よりよく生きること諦めてしまった者に残されているよりよい死に方の希望だった。自分に向かつて積極的に動いてくる二郎に、まるで堰を切つたように死の希望を語るお直を見ると、そこに彼女の口にしたことのない孤独の「淋しみ」を感じないではいられない。

このように、お直と三人のエピソードの女達は、「淋しい笑い」を軸としてみたとき、相通ずるものがある。そして、「笑い」だけに止まらず、彼女らは幾つかの共通点で結ばれている。

「精神に異状を呈し」た「娘さん」は、

「蒼い色の美人だつた。さうして黒い眉毛と黒い大きな眸を有つている。其黒い眸は始終遠くの方の夢を眺めてゐるやうに恍惚と潤つて、其処に何だか便のなささうな憐を漂よはせてゐた。僕が怒らうと思つて振り向くと、其娘さんは玄関に膝を突いたなり恰も自分の孤独を訴へるやうに、其黒い眸を僕に向け

た。僕は其度に娘さんから、斯うして生きてゐてもたつた一人
で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さいと袖に縫られ
るやうに感じた。―其黒い大きな眸が僕にさう訴へるのだよ。』
〔傍線部筆者〕（「友達」三十三）

特に、この傍線を引いた部分と、次の、二郎による嫂像と比べてみ
ると、その相貌のうり二つであるのには驚く他はない。

枕を叩くやうな雨滴の音の中に、自分は何迄も嫂の幻影を描
いた。濃い眉とそれから濃い眸子、それが眼に浮かぶと、蒼白
い額や頬は、磁石に引ひ付けられる鉄片の速度で、すぐ其周囲
に反映した。〔傍線部筆者〕

（「塵勞」五）

二人（三人）の人物を特徴づけているのは、「蒼い」、「濃い」、「黒
い」それに「淋しい」という語である。注目すべきことは、「娘さん」
の「黒い眉毛と黒い大きな眸」に重複させるかのように、お直も「濃
い眉毛とそれから濃い眸」（「塵勞」五）、さらに「蒼白い額や頬」（同）
を有たされているという点である。このように「娘さん」とお直は、
容貌の面からも通ずるものがある。

では、性質の面ではどうだろう。お直は「落ち付き」も「品位」
もある（「塵勞」六）婦人であり、片や「娘さん」は「氣狂」（「兄」
十二）であるから、同類人物とは言い切れない。ところが、「娘さん」
が「氣狂」になる以前を見れば、彼女は「一口も夫に対して自分の
苦しみを言わずに我慢していた」（「友達」三十三）という「いわゆ
るしつかりもの」（「塵勞」六）であり、またこれは、お直が和歌山
での一夜の場面で二郎に、「兄さんについて今までなんの不足を誰に
も言ったことはない積です」（「兄」三十一）と、「泣きながら」、「途
切れ途切れに」（同）語った言葉を、同じ意図の下に書かれたもので
あると思われる。

お直が忍耐していたのと同様、「我慢していた」「娘さん」も忍耐
の人だったのであり、また逆に、「娘さん」が狂気に陥る程の深い苦
労をその胸に潜ませていたのと同様に、お直の胸のうちにも、その
苦悩と相通ずるだけの苦しみが秘められているのだと言えるのでは
ないだろうか。

さて、「娘さん」によく似た女として、胃潰瘍の重病人である「あ
の女」が登場する。「あの女の顔がね、実はその娘さんによく似て居
るんだよ」（「友達」三十三）というのだから、あるいは、「あの女」
も、「娘さん」やお直と同じように「黒い眉毛と黒い大きな眸」を有
った「蒼い色の美人」であるかもしれない。

また、「あの女」についての描写には、次のものがある。

其時あの女は忍耐の像の様に丸くなつて凝としてゐた。けれども血色にも表情にも苦悶の迹は殆んど見えなかつた。自分は最初其横顔を見た時、是が病人の顔だらうかと疑つた。たゞ胸が腹に着く程脊中を曲げてゐる所に、恐ろしい何物かゞ潜んでゐる様に思はれて、それが甚だ不快であつた。自分は階段を上りつゝ、「あの女」の忍耐と、美しい容貌の下に包んでゐる病苦とを想像した。(傍線部筆者)

(「友達」十八)

「あの女」は、「忍耐の像」と表現されている。そして、その印象を共有するかのようには、お直は「忍耐の権化」(「塵勞」六)として語られているのである。またこの他にも、傍線部に見られるような類似点も認められるので、以下、対照するお直の描写をあげておく。

或刹那には彼女は忍耐の権化の如く、自分の前に立つた。さうして其忍耐には苦痛の痕迹さへ認められない気高さが潜んでゐた。彼女は眉をひそめる代りに微笑した。泣き伏す代りに端然と座つた。恰も其座つてゐる席の下からわが足の腐れるのを待つかの如くに。要するに彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆んど彼女の自然に近い或物であつた。(傍線部筆者)

(「塵勞」六)

胃潰瘍を患つた「あの女」は、「ことによると死ぬかもしれない」(「友達」三十一)。「あの女」は、「死」というものと常に隣り合わせになる程の苦痛に悩まされながら、「病人の顔だらうかと疑」ぐる程、「血色にも表情にも苦悶の迹は殆んど見せ」ずに、「忍耐」するのである。そして、お直も、「死ぬ事は、死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ」(「兄」三十八)と洩らすように、「死」というものを常に心の中で飼ひ慣らさざるを得ない程の苦悩を秘めながら、普段は「忍耐」によつて平静を装う。「あの女」も、お直も、苦悩に跪きながら、それを表面に押し出して来ない「忍耐」の人なのだといえよう。そして、彼女らを「忍耐」に追いやる原因となるものこそ異質であるが、それによつてもたらされた苦悩は、共に「死」さえ予期する程の激烈さを秘めているのである。その激烈さは、「あの女」の場合、「血を吐くんだ」(「友達」二十)とか、「滋養浣腸さへ思はしく行かなかつた」(同二十四)などを始めとした、病状から伺うことが出来る。そして、その病状の様は、暗に掴みどころのないお直の苦悶の程度を表しているとも考えられる。

「娘さん」は、忍耐を経て「氣狂」（「兄」十二）になった。「あの女」は、忍耐の中で「死」（「友達」三十一）を予期しつつある。「死」、「氣狂」と並んだ時、私たちはそこに、一郎が旅行の際に吐いた、「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」（「塵勞」三十九）の一節を、連想してしまふのである。そこで、一郎ではなく、お直の場合、エピソードの女達と同じ道に入るかを考えさせる。

第二節 お直との相違点

前節のように、お直との共通した点について幾つかの特徴を取り上げて見てみたが、一方、対照的に描かれているのも明らかにあった。

まず、精神病の娘さんは、ちょうどお直と対照的である。彼女は「ある纏綿した事情」（「友達」三十三）のために離縁となつたのだ。その理由で「精神に異常を呈し」（同三十二）たし、やがて死ぬ彼女は、明らかに制度下の犠牲者といつてよい。そしてその彼女は、三沢が外出する時に必ず「早く帰つて来て頂戴ね」（同）と言つたという。この言葉について一郎が、世間並みの責任が消えたために出てきた「普通我々が口にする好い加減な挨拶よりも遙に誠の籠つた純粹のものぢやなからうか」（「兄」十二）と解釈しているが、お直の戦略に苦しむ彼の目にそう見えるとしたら、彼女の言葉は實際「誠の籠つた純粹のもの」である。彼女は病によつて「純粹」さを得たのであり、それに照らせばむしろお直の自意識の方こそが病んでいることがわかる。したがつて、精神病の娘さんはお直を写し出す鏡に他ならない。

同様の対照がお貞とお直にもある。「お貞さんは生れ付からして直とは丸で違つてる」（「帰つてから」七）と一郎が言っているが、だとすればやはり彼女らは「生れ付」が違ふのである。そのお貞に関して次の記述がある。

自分の見た所では、お貞さんが宅中で一番の呑気ものらしくつた。彼女は永年世話になつた自分の家に、朝夕箒を執つたり、洗ひ洒ぎをしたりして、下女だか仲働だか分らない地位に甘んじた十年の後、別に不平な顔もせず佐野と一所に雨の汽車で東京を離れて仕舞つた。彼女の腹の中も日常彼女の繰り返しつゝ慣れ抜いた仕事の如く明瞭でかつ機械的なものであつたらしい。

（「帰つてから」三十七）

お貞の縁談を契機に結婚について考え始めた二郎には、彼らのそれが「ちんころの様に、何でも構はないから、只路に落ちてさへる

れば拾つて来るといふやうな遺口」(「帰ってから」二十)に見えてきた訳だが、ここで彼が問題にしているのは、「下女だか仲働だか分らない地位に甘んじ」、その上「別に不平な顔もせず」に「ちんころの様に」佐野と結婚して行くお貞の自意識のなさについてである。お直の自意識の戦略に「愉快」(帰ってから)「一」を覚えることもできる程に親しんだ彼の目に、お貞の「腹の中」が「明瞭でかつ機械手的」に見えるのは当然だが、そうしたお貞のいわば無私人柄を二郎が「呑気もの」と見ているのは注意されてよい。そこに彼の自意識のありようが露呈しているからであるが、二郎とは逆にお直の戦略に苦しむ一郎には、同じお貞の人柄が「宅中で一番慾の寡い善良な人間」(「塵勞」四十九)、「幸福に生れて来た人間」(同)として見えている。お貞を見る両者の目の違いは、お直の自意識との両者の関わり方の違いであり、従つてお貞はそれを写し出す鏡である。

では、前も言つたように、「娘さん」は忍耐を経て「氣狂」になり、「あの女」は、忍耐の中で、「死」を予期されるのに対して、「宗教」と言う道に歩み寄つていった女とは、一体誰であろう。それは「盲目の女」である。そして、この女もお直と同様「黒い眸」と「濃い眉」(「帰ってから」十五)を持つ。最初、彼女は「表情のない盲目」(同)であるが、盲目でなかつた昔は、「黒い眸」には、意味深い訴えが秘められていたようだ。

「景清を女にしたようなもの」である盲目の女には、強さがあり、「氣込み」がある。(「帰ってから」十六)。勇ましい景清にも、強い言葉のうちには、「忍耐」が多分に秘められていたのであるから、盲目の女も、「忍耐」と搦めて考えてよいだろう。「ただ両方の目が満足に開いて居る癖に、他の料簡方が解らないのが一番苦しい御座います」(「帰ってから」十八)という盲目の女は、「一旦契つた人の心を確実に手に握れな」(同)いことに、憤りと「苦痛」(同)を感じて。そして、その「苦痛」を誰にも打ち明けずに忍耐し、自らの心の中で燻らせていたのであるうと想像される。

「二十年以上の〇〇胸の底に隠れてある此秘密を掘り出し度くて堪らなかつたのである。」(同)盲目の女は、一郎の父から、男に「軽薄な所は些ともない」(同)と聞かれ、「最初はね、その位な事ぢや中々疑りが解けな」(同十九)かつたものの、とうとう「納得」(同)し、二十数年間心内で燻らせていた疑問に結着をつける。「盲目の女」は、信じられるものが欲しかつたのだ。一生を賭けて、確かな真実を知りたかつたのだ。しかし、「盲目の女」が信じようとしたものは、「軽薄」で「摯実の氣質がない」(同二十一)父の口から出た、「いい加減」(同十八)で「出鱈目」(同十九)なものだったのである。では、お直はどうだつたのだろうか。お直は「畏れない」(「塵勞」四)、「驚かない」(「兄」三十三)、「落ちつゐて居る」(「兄」三十七)。

それでいて、「盲目の女」のように信ずる道には入っていけない。「あの女」は、苦悶し、忍耐し、「死」に受け入れられていく。しかし、お直は、それと同じ程の苦悩と忍耐を持ちながら、「死」ねない。「娘さん」は、苦しみ、我慢し、「狂気」に落ちる。しかし、お直は、「狂」うこともできない。そして、「盲目の女」は、苦悩と忍耐の末、「信」ずる道を歩んでいこうとしている。しかし、お直は「信」ずる道に歩み寄ることもできないのである。お直は、エピソードの女達と幾つかの共通点を持たされながら、最終的には、「死」、「狂気」や「宗教」のいずれにも囚えてもらえない女なのだ。

第二章 お直の内面と主体性

前章では、女達の「外観」について見てみたが、その「黒い瞳」など、何らかで象徴される女性像は、やはり男性のように生まましくは描かれてこない。また、視点の問題から見ると、女達は視点人物として作品を導いていくことはない。そこまで行かなくても、女性から見た男性像、或いは女性による男性の批判というようなものさえ、断片的にしか見られない。そこに描かれているのは、常に男性の目を通して見た女性の姿、或いは男性に対しての、男性にとつての女性の意味でしかない。そうなると、それらの女性像は常に「見られる者」として描かれることはあつても、彼女自身の「見る者」としての内面は描かれなれないということになる。外観の強烈な新鮮なイメージにも関わらず、彼女達の「生」は常に「謎」めいていて、その心理は曖昧である。また、漱石の女性描写は、初期では確かに「夢」や「憧れ」に過ぎなかつたことはいろんな人が言っていることであるが、(注8)それが次第に肉体化された人物像となり、主題の中で重要な役割を占めてくる中期以後の、明治の女として足を地に着けたかに見える女性達も、彼女自身の言葉ではしゃべらない。要するに女性の内面を内側から描こうとはせず、あくまで男性を通して描こうとしたのである。本章では、お直を中心に追いながら、漱石文学における女性の創造の意味をもう一度考えてみようと思う。

第一節 お直の内面

はじめにお直のイメージを追ってみよう。お直は長野一郎の妻、芳江という一女の母であり、舅・姑に仕える嫁でもある。これは三沢の話に出てくる精神病の出入りの女を、「三沢は一旦嫁いで出て来た女を娘さん」と言つた」という二郎の指摘のように「娘」という言葉で表現していることと、父の話に出てくる盲目の女をただ「其女」としか表現していないことと対象的である。またお直が結婚した女であつて「家」や「家族」とくに「夫」によつて束縛された立場にいてことは、藤尾や美禰子が結婚前の自由な身分だったことと対比して考えてよいことで、これは飛鳥井雅道氏の指摘(注9)もあるように、より生活的、日常的な女性の創造として漱石が意図したものであるうし、また「結婚」がお直に与えた変化や意味もまた重要視するべきものであるという点でよく考え直してみるべきである。

「お貞さん、結婚の話で顔を赤くするうちが女の花だよ。行つ

て見るとね、結婚は顔を赤くする程嬉しいものでもなければ、
恥づかしいものでもないよ。それ所か、結婚をして一人の人間
が二人になると、一人でゐた時よりも人間の品格が墮落する場
合が多い。恐ろしい目に会ふ事さへある。まあ用心が肝心だ」
（「帰ってから」六）

引用文は結婚を控えた使用人のお貞に、一郎が訓戒を施す場面であ
るが、ここには端的に一郎とお直の結婚生活がどのようなもので
あったかが表れている。この一郎には、もう一つ結婚に関する有名
な言及が認められる。

「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪に
なるのだ、さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らな
い。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過るぢや
ないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求できる
ものぢやないよ」

（「塵勞」五一）

一郎は、お直と共に幸福を作り出そうとするのではない。家長と
して一方的にお直に幸福を「要求」しているものであり、そこではお
直は対等な人間として捉えられていないのである。このような関係
の内実を明確に理解していたのは、当然支配される側のお直であつ
た。

「男は厭になりさへすれば二郎さんみたいに何処へでも飛んで
行けるけれども、女は左右は行きませんから。妾なんか丁度親
の手で植付けられた鉢植のやうなもので一遍植えられたが最後、
誰か来て動かして呉れない以上、とても動けやしません。凝と
してゐる丈です。立枯になる迄凝としてゐるより外に仕方がな
いんですもの」

（「塵勞」四）

一郎が結婚という言葉で表現した内容が、お直にとっては「鉢植
のやう」に「親の手で植え付けられ」る事に他ならなかつた。お直
にとつての結婚とは、親によつて作られた関係であつたのである。
自分の意思を持つ人間でありながら親の意向に従わねばならず、ま
たそれが当たり前の時代ではあつたが、自分を「鉢植のやうなもの」
と言ひ切るお直の認識は冷徹でさえあり、それゆゑに苦渋の深さも
相当なものであつたらう。何かが提案され、何を選ぶか人々に相談
をもちかけられる場合は常に「何うでも好いわ」（「兄」二十六）と

答える「愛嬌」のない人である。この「愛嬌」のなきは、岡田の妻お兼や一郎の妹お重の「愛嬌」と対照して印象的なお直のイメージを形造っている。しかし、一度事が決定すると大胆に、かつ怖れずに「自然其儘に取り済ま」(「帰ってから」三十六)すことの出来る柔軟な強さを持っている。和歌山で嵐の一夜を二郎と共に過すことになっても、おかしな程慌てて落ち付かない二郎に反して大胆である。二郎の目から見たこれらのお直のイメージは、次のようにまとめられる。

自分は腹の立つ程の冷淡さを嫁入後の彼女に見出した事が時々あつた。けれども嬌め難い不親切や残酷心はまさかにあるまいと信じてゐた。

(「兄」十四)

結婚する前のお直を知っていた二郎が、「嫁入り後」に冷淡さを見せるようになったお直の態度に言及していることは、彼のように単純な者でさえ気付くような著しい変貌が生じていたことを窺わせる。そればかりか「嫂は無口な性質であつた。」(「兄」四)「彼女は淋しい色沢の頬を有つてゐた。それから其真中に淋しい片鬢を有つてゐた。」(「兄」六)というように、二郎の目に映じた限りのお直の姿からは、嫁入つてからの姑や気難しい主人、それに「火と水の様な個性の差異」(「帰つてから」十)を持つ小姑のお重との間で、四重の気苦労を重ねて来たお直の来し方を察することが出来る。

―彼女は男子さへ超越する事の出来ないあるものを嫁に来た其日から既に超越してゐた。或は彼女には始めから超越すべき壁もなかつた。始めから囚はれない自由な女であつた。彼女の今迄の行動は何物にも拘泥しない天真の発現に過ぎなかつた。或時は又彼女が凡てを胸のうちに畳み込んで、容易に己を露出しない所謂しつかりものゝ如く自分の眼に映じた。さうした意味から見ると、彼女は有り触れたしつかりものゝ域を遥に通り越してゐた。あの落付、あの品位、あの寡黙、誰が評しても彼女はしつかり過ぎたものに違ひなかつた。驚くべく凶々しいものでもあつた。

或刹那には彼女は忍耐の権化の如く、自分の前に立つた。さうして其忍耐には苦痛の痕迹さへ認められない気高さが潜んでゐた。彼女は眉をひそめる代りに微笑した。泣き伏す代りに端然と座つた。恰も其座つてゐる席の下からわが足の腐れるのを待つかの如くに。要するに彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆んど彼女の自然に近い或物であつた。

一郎が、「おれが靈も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚してゐる事丈は慥だ」(「兄」二十)とお直が全く理解できないのを慨嘆しているように、二郎の目にもお直の態度は理解の範疇を越えている。石原千秋が「身体は、言葉とは違つて様々なノイズに満ち満ちている。お直の身体は、むしろ饒舌だとさえ言えよう」(注10)と指摘する所以だが、しかし身体より明解であるはずのお直の今までの言説を、二郎が理解していたかというところ、そういうわけでもないのである。

「自分の年なんか、いくら冷淡でも構はないから、兄さんに丈はもう少し気を付けて親切に上げて下さい」

「妾そんなに兄さんに不親切に見えて。是でも出来る丈の事は兄さんに為て上てる積よ。(後略)

(中略)
「だつて夫や無理よ二郎さん。妾馬鹿で気が付かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるかも知れないけれど、是で全く出来る丈の事を兄さんに対してしてゐる気なんですもの。―妾や本当に腑抜けなのよ。ことに近頃は魂の抜殻になつちまつたんだから」

(中略)

「妾のやうな魂の抜殻はさぞ兄さんには御氣に入らないでせう。然し私は是で満足です。是で沢山です。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない積です。(後略)

(「兄」三十一)

このように読者は、和歌山での一夜を物語る二郎の報告から、お直の内面を知ることができる。「腑抜け」「魂の抜殻」という言葉が、お直の苦しい家庭生活の内実を窺わせるキーワードであることには注意されるだろう。「彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越えして、殆んど彼女の自然に近い或物であつた。」と二郎は述べたが、忍耐が彼女の自然になるほどに、忍耐に馴致されてしまったお直の内面の荒廃に二郎は果して気が付いていたのであろうか。「家」の中で嫁・妻・嫂・母役割によつて拘束され、(注11)「我儘」な一郎との夫婦関係に苦勞している上に、さらに「親切に上げて下さい」と言われるのでは、お直も立つ瀬がない。しかも離婚しても自活していく道が閉ざされている以上、当時の女性としては死を選ぶか、あるいは三沢の話の中に出てきた離縁された娘さんのように気が狂うし

かないのである。そのことがお直の念頭に無かったわけではなく、和歌山での一泊が決まった時の宿屋では、「(前略)妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌よ。大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」(同三十七)と、お直は二郎に語るのである。

「姉さんが死ぬなんて事を云ひ出したのは今夜始めてですわね」
「え、口へ出したのは今夜が始めてかも知れなくつてよ。けれども死ぬ事は、死ぬ事は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ。だから嘘だと思ふなら、和歌の浦迄連れて行って頂戴。屹度浪の中へ飛込んで死んで見せるから」

(同三十八)

とまでお直は発言する。さらに「あなた昂奮々々つて、よく仰しゃるけれども妾や貴方よりいくら落付いてるか解りやしないわ。何時でも覚悟が出来てるんですもの」(同)と語る姿は、「こゝろ」でKが「覚悟、――覚悟ならない事もない」(「下四十二」)を呟く姿をすら想起させよう。このように、ここには長野家の「家」の変容の過程において漏れでた、被抑圧的状况下の女性の苦渋に満ちた内面世界を認める事が出来るはずなのである。

ところが、このようなお直の内面の吐露が、二郎には全く通じていなかった。以下は、嵐の夜の先の問題につづく翌朝の二郎の語りである。

自分は嫂の後姿を見詰めながら、又彼女の人となりと思ひ及んだ。自分は平生こそ嫂の性質を幾分かしつかり手に握つてゐる積であつたが、いざ本式に彼女の口から本当の所を聞いて見やうとすると、丸で八幡の藪知らずへ這入つた様に、凡てが解らなくなつた。

凡ての女は、男から観察しやうとすると、みんな正体の知れない嫂の如きものに帰着するのではあるまいか。経験に乏しい自分には斯う考へて見た。(後略)

(同三十九)

「凡てが解らない」「正体の知れない嫂」というように、お直のあれほど切実な内面の吐露も、二郎には全く理解されていない。二郎は「自分は何と報告して好いか能く解らなかつた。云ふべき言葉は沢山あつたけれども、夫を一々兄の前に並べるのは到底自分の勇氣では出来なかつた。よし並べたつて最後の一句は正体が知れないといふ簡単な事実に帰する文であつた。」(同)と述べるだけなのである。しかしお直は「正体が知れない」どころではなく、「死ぬ事は何う

したつて心の中で忘れた日はありやしないわ。」(同三十八)という
発言に照らせば、長野家の「家」の中で、家長たる夫とその親族を
相手に相当な「忍耐」と「覚悟」で持つて生きている女性として現
れてくるはずなのである。

第二節 お直の主体性

まず、ここで言う主体性について説明しておきたい。それは主に
女性の自らの言動に対する自己決定権を指す。本節では、お直の性
的主体性―結婚及び性的欲望の表出についての自己決定について論
じてみたい。

お直は長野家の長男一郎の妻であり、親兄弟と同居している。い
わば、複合家族の嫁である。血縁関係で結ばれている長野家の家族
員たちにとって、彼女は「他人」である。彼女と一郎の振れた夫婦
関係において、一郎の偏屈な性格を認めながら、姑も、小姑も、お
直を責めている。ひそかにお直に同情する二郎でさえ、一郎に働き
かけるようにお直に要求している。この血で繋がる家族員に一人で
対峙するお直は、明らかに無力である。

明治大正時代、「良妻賢母」思想は「家」の中の女に対する規範と
して、既に定着していた。さらに家父長制により夫婦の非対称的な
関係が法律(注12)で規定された。こうして男女間、夫婦間にヒエ
ラルヒーが生まれた。そして、男尊女卑、妻から夫への従順や愛嬌
ある振舞いは、男にとって当然であるばかりではなかった。女たち
もまた、これらを内面化していたに違いないだろう。

一郎夫婦のしつくりしない関係を前に、長野家の母や重は、直一
人に能動的な行動を要求する。彼女たちから見ても、妻であり、妻で
ある直が、夫に対して従順だけではなく、愛嬌を振りまいて夫の機
嫌をとるのは、義務であった。しかし、直は二郎に

「妾そんなに兄さんに不親切に見えて。これでも出来るだけの
事は兄さんにして上てる積よ」

「妾のような魂の抜殻はさぞ兄さんには御氣に入らないでしょ
う。しかし私はこれで満足です。これで沢山です。兄さんに
ついて今まで何の不足を誰にも言った事はない積です。その
位の事は二郎さんも大抵見えていて解りそうなものに……」

(「兄」三十一)

と訴えている。もつと「積極的に」と要求される彼女の逃げ道は「魂
の抜殻」となることであった。

しかし、長野家の母と重と二郎が直に求めていたのは、果して一郎の求めていたものと同じだったのだろうか。決してそうではあるまい。石原千秋氏は、「姑も、彼女に一郎に対して愛嬌を振舞うことを望んでいるが、それが妻としてのものにとどまって」おり、「一郎が直に求めているものは違」つて、「一郎は、妻としてではなく、女として愛情を直に求めている」と指摘している。(注13) 実際一郎は、

「自分は女の容貌に満足する人を見ると羨ましい。女の肉に満足する人を見ても羨ましい。自分はどうかあっても女の霊というか魂というか、いわゆるスピリットを攫まなければ満足出来ない」

「おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚している事は確かだ」

(「兄」二十)

と思ひ苦悶している。一郎が直に求めているのは建前だけの「愛嬌」ではなく、魂からの愛情、言い換えれば、異性に対する主体性を持った愛情だった。しかし、「魂の抜殻」という直の自己定義が示すのは、魂Ⅱ主体性に対するあきらめである。これは、性的主体性の不在を暗示しているとも言える。性的主体性をあきらめた直に主体的愛情を求めることが可能だろうか。

石原千秋氏は、「近代における女性の主体性は。男性の主体性に突きつけられた、最も困難な課題だった」と述べている。さらに、女性のヒステリーは「二流の国民」の証となり、女性の能動的な性欲は否定されたのだという。石原氏によれば「女性は自らの意志で男性を選べるのか」という問いは、女性の内面を不可視化する。(注14) 直は「妾なんかちようど親の手で植付けられた鉢植えのようなもの」(「塵労」四)だと二郎に訴える。近代の見合い結婚では、女性の主体性は不問に付される。それはなぜだろうか。石原氏の指摘する「二流の国民」の女性には性欲がない、あっても受動的であるうという女性の性的自己決定を否定するイデオロギーである(注15)。このように女性たちは、意識的無意識的に自分の主体性を無化、あるいは曖昧化していくしかなかった。そうして、女性の内面は不可視化するのだ。だから、二郎に「正直なところ姉さんは兄さんが好きなんですか、又嫌いなんですか」と聞かれた直の答えは、「貴方何の必要があつてそんな事を聞くの。兄さんが好き嫌いかなんて。妾が兄さん以外にすいている男でもあると思つていらつしやるの」(「帰つてから」三十二)といういかにも曖昧なものであつた。このような「魂の抜殻」になつた「腑抜」の直に、一郎が魂からの愛

情を求めること自体が、一郎の直に対する理解の欠如を証している
と同時に、一郎の敗北を不可避にするのである。

第三章 お直の存在

確かに『行人』において、一郎の妻お直への嫉妬に発すると思われる疑念を中心に話は展開しており、その果たす役割は大きいであろう。しかし少なくとも「塵勞」の途中、Hさんの手紙が紹介されるまでの「お直」は、一郎の虚妄めいた疑念、奇矯な言動に対峙するような存在としてあるのではないかと思われる。本章では、「お直」の人間像が『行人』一篇にもたらす意味について考察したい。まず、一郎像を見て行くと、

他人の前へ出ると、また全く人間が変った様に、大抵な事があつても滅多に伸士の態度を崩さない、円満な好同伴であつた。

(「兄」六)

「外では至極穩か」(「塵勞」十五)なのに反し、他者の人格を無視してそれに氣付かない矛盾に満ちており、その育てられ方にも起因して家庭に君臨する姿を見ることになる。明治も四十年代となり明治に育つた第二世代が家長の位置につきつつある姿として、一応読むことができよう。(注16)しかしながら、ここで注意しなければならぬのは、一郎は父に比べ、君臨するが家を経営する能力に欠けているということである。

一郎の横暴とも見える氣難しさや我が儘は精神の変調による場合もあるが、

父が昔堅気で、長男に最上の権力を塗り付けるやうにして育て上げた結果

(「兄」二)

長男丈に何処か我が儘な所を具へてゐた。自分から云ふと、普通の長男よりは、大分甘やかされて育つたとしか見えなかつた。自分許ではない、母や嫂に対しても、(中略)一旦旋毛が曲り出すと、幾日でも苦い顔して、わざと口を利かずに居た。

(「兄」六)

というような育てられ方にも起因する。しかしまた一方では「機嫌買」(「塵勞」十二)であるため「氣質が女に似て陰晴常なき天候の如く変」(「兄」十九)るため「自分は彼を尊敬しつゝも、何処か馬鹿にし易い所のある男の様に」(同)見え、例の和歌山での一夜によつて嫂に「同情が加は」(同四十四)る以前から二郎がみくびるような軽さも持っているのである。

一郎の変人ぶり(「塵勞」十一)が異常を呈し始めた段階で、

父と母は差し向ひになつて小さな声で何か話し合つてゐた。其様子は今しがた自分一人で家中を陽気にした賑やかな人の様子とも見えなかつた。「あゝ育てる積ぢやなかつたんだがね」といふ声が聞えた

(「塵勞」十一)

如何にも兄の存在を苦にしてゐるらしく見えて、甚だ痛々しかつた。彼等(ことに母)は兄一人のために宅中の空気が湿つぽくなるのを辛いと云つた。尋常の父母以上にわが子を愛して来たといふ自信が、彼等の不平を一層濃く染めつけた。

(「塵勞」十二)

と見えるように、自分達が育てておりながら、両親の力では既に操ることが出来ないところまで肥大した「変人」ぶりを、ただ手をこまねいて見ている以外に為すすべのない。非力な立場なのである。つまり、父は縁側の彼方の二間にかろうじて威光を保つのみで、現実生活が演じられてゐるこちらの世界では、旧来の秩序は後退を強いられてゐる(注17)。しかしながら長野家の場合、父の威光が通じなくなつたというばかりで、一郎や二郎・お重・嫂といった若い新しい世代にその中心を移しながら、未だ家を斉める技量に乏しい一郎のために、新しい秩序は十分に形成されるにはいたつていないのである。お直はこのような長野家に、長男の妻として「親の手で植ゑ付けられた」(「塵勞」四)わけである。

長野家における人々のぎくしゃくした関係がお直と一郎の不和から来ていることは言うまでもないが、そこにはお直の自意識が大きいかかわつてゐる。血縁で結ばれた長野家の人々の中で「他家から嫁に来た女」(「帰つてから」九)である彼女が、自分の居場所を作るために取つた戦略、それが長野家の人間関係にはね返つてゐるからである(注18)。たとえば芳江に関して次の記述がある。

芳江は我々が帰るや否や、すぐお重の手から母と嫂に引渡された。二人は彼女を奪ひ合ふ様に抱いたり下したりした。

(中略)

この眸の黒い髪の沢山ある、さうして母の血を受けて人並よりも蒼白い頬をした小女は、馴れ易からざる彼女の母の後を、奇蹟の如く追つて歩いた。それを嫂は日本一の誇として、宅中の誰彼に見せびらかした。ことに己の夫に対しては見せびらかすといふ意味を通り越して、寧ろ残酷な敵打をする風にも取れた。

(「帰つてから」三)

長野家において唯一自分の血をひく芳江を引きつけておくことは、

彼女が長野家の人々にとつても血を分けた親族であり、かつ子供であるだけにお直の立場を強くする。この二人の關係には、いわばうかつに手を出すことができないのであり、時折敢えてそれをする重も結局齒が立たない。お直にとつて芳江との關係は、一郎に同情の多い母やお重と、そのお重を「可愛がる」「帰ってから」「十」一郎達の關係への対抗であり、そしてその争いはお直が二郎を引き込むことによつて一層熾烈なものとなる。お直について、母はある時「一体お直の氣立は好いのかね悪いのかね」「帰ってから」「三十八」と尋ねる。母のお直に対する疑問は今に始まったことではなく、和歌の浦の海岸を歩く母の口からも聞かれるのである。「一体直は愛嬌のある質ぢやないが、御父さんや妾には何時だつて同じ調子だがね。二郎、御前にだつて左右だらう」「兄」「十四」と言う。つまり夫に對してのみ「つらあてがましく遣つゐる」(同)のではないかということである。この母の觀察は現象的には一応正しいと言わねばなるまい。二郎も「腹の立つ程の冷淡さを嫁入後の彼女に見出した事が時々あつた。(同)と言っているのである。しかし二郎はそうした現象の背後にある彼女の人格から、

彼女は決して温かい女ではなかつた。けれども相手から熱を与へると、温め得る女であつた。持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を搾り出す事の出来る女

(「兄」十四)

と見、「嬌め難い不親切や残酷心はまさかにあるまいと信じてゐる」(同)のである。そして二郎によれば、兄もまた直と同じ「氣質を多量に具へてゐた」ため、「同じ型に出来上つた夫婦は、己れの要するものを、要する事の出来ないお互に對して、初手から求め合つてゐて、未だにしつくり反が合はずに居る」(同)のだというのである。しかし、「冷淡」「愛嬌」のないように端然と「済ま」しているはずのお直の内面は、はたしてどんなものであるうか。結婚によつて變化した彼女ははたして幸せな人間なのだらうか。女性の側から内面をのぞいてみたいというのは、かなり難しいが、二郎と二人きりになった時のお直の言動には、かなりその内面を伺わせるものがある。和歌山の夜、彼女の口から出た「ロマンチックな言葉」「物凄いい決心」は、彼女のそんな「淋しい」平生には見出せない、彼女の持つ生のエネルギーのようなものを物語っている。

もし本当の海嘯が来てあすこ界限を悉皆攫つて行くんなら、妾本當に惜しい事をしたと思ふわ——何故つて、妾そんな物凄いい所が見たいんですもの。

あら本当よ二郎さん。妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌いよ。大水に攫われるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死方がしたいんですもの。本に出るか芝居で遣か知らないが、妾や真剣にさう考へてゐるのよ。嘘だと思ふなら是から二人で和歌の浦へ行つて浪でも海嘯でも構はない、一所に飛び込んで御目に懸けませうか。

(「兄」三十七)

そして、

え、口へ出したのは今夜が始めてかも知れなくつてよ。けれども死ぬ事は、死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ。

あなた昂奮昂奮つて、よく仰しやるけれども妾や貴方よりいくら落付いてるか解りやしないわ。何時でも覚悟が出来てるんですもの。

(「兄」三十八)

という言葉には、生のエネルギーを支える強さを逆に生むところの現実への強い不満、そこから生れる運命感がある。「けれども寡言な彼女の頬は常に蒼かった。さうして何処かの調子で眼の中に意味の強い解すべからざる光が出た」(同)という描写や、「何時でも覚悟が出来てるんですもの」(同)と言うところなどには、受身な生き方をする女性だけが持っている「生」のたくましさのようなものが見うけられる。

このようなお直の現実に対して一郎はどのような思っているのでしょうか。またお直によつて一郎はどのような影響を受けているでしょうか。お直との「結婚」は、一郎に何を教えたでしょうか。一郎がお直を愛しているか又は魅きつけられていることは確かである。お直が常に「落付いて」「何うでも結構」だと物事に執着しないのに反して、執念深いところのある一郎は、お直の心が知りたい、「スピリットを擡」みたい、「信じたい」と一途に思っている。しかし、そういうお直に執着する心を「牢屋見たいだな、人間も此通りだ」(「兄」十六)とエレベーターに託して自分の心を窮窟なものとして自嘲している。しかしそれでも「直の節操をお前に試して貰ひたい」(「兄」二十四)と二郎に依頼して暗い疑惑を晴らさずに「居ても立っても居られない」気持ちにとわれている。このように一郎とお直の関係は、和歌山の嵐の夜を境として次第に代わつて来る。

一郎の変容(注19)はすなわちお直への絶望、結婚生活への絶望である。お直を打擲する事件から、Hさんとの旅の決意まで、一郎はお直をあきらめ捨てたというよりも、お直をあきらめ捨て切れな

いで悩み、他者と自己との隔絶に苦しむあまりに精神に異常を来したかと思えるほどの孤絶から逃れようとするところに始まる。お直の

延ばしやなさらないわよ

兄さんは妾に愛想を盡かして仕舞つたから、それで旅行に出掛けたといふのよ。つまり妾を妻と思つてゐらつしやらないのよだから妾の事なんか何うでも構はないのよ。だから旅に出掛けたのよ。

〔塵勞〕二十五

という言葉はその意味的を射ていると言えよう。以前はお直が一郎の機嫌を直そうとすればなのに、ここでは一郎は全くお直の手と心から離れようとしている。一郎はお直に魅かれ、心を攫みたいと焦り、失敗することによつて

君は結婚前の女と、結婚後の女と同じ女だと思つてゐるのか
何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。
自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやないよ。

〔塵勞〕五十一

という結婚不信に達し、そして一番身近なものとの隔絶が全ての他者との隔絶となつて、孤独の境へさまよい出てしまつたのである。『行人』の主題において一郎に孤独な実存を自覚させる者としてのお直の役割は、このように果されるわけである。こうした重い切実な思いに見合う登場人物としては、深く絶望し「死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ」〔兄〕三十八〕と二郎に語るお直が存在しているだけではないか。家制度の中で、また女性の自立が容易ではない中で「親の手で植付けられた鉢植えのやうな」〔塵勞〕四〕存在として家族、夫にまで理解されず「忍耐の権化」〔塵勞〕六〕のようにして暮らさざるを得ないお直の悲劇性を描くことについては、漱石はかなりの力を費やしている。こうして、お直の存在は『行人』の「結婚」と孤独の問題を描く上でなくてはならない。

本論文を通して、『行人』の主題（作者の意図）は、平凡な人間であること、またその努力をしている過程を重視することと見るべきである。と理解出来た。また、『行人』で描かれているものが、一郎の孤独と苦悩だけではなく、一郎の周囲の人物の問題についても、漱石は大きな分量を割いて描いていることも心得た。

一郎は人間らしく生きる幸せな道が、学問だけではないことを自覚しはじめている。当たり前のように仕事を優先した従来の男たちとは異なっていて、家庭を大事にする一郎の価値観はかなり現代風である。一郎は「最も親しかるべき管の人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られない」（「兄」二十）と、「最も親しかるべき管」のお直との関係を優先した。だが、一郎が真の愛を妻に求めていても、夫が男権・夫権で妻を支配する上下関係では、それは成り立ちほしない。妻の方も表面上では夫に尽くすかのように見えても、心の底はそれを拒否してしまふ。そのゆえか、『行人』の各章では、「淋しい唇」を寄せ、「例の片唇」を見せ、「いつもの通り片唇を見せて笑」うお直があり、またそのお直は「兄」（三十一）、（四十）、（四十四）においても「変に淋しい笑ひ方」をし、「淋しい唇」に「冷かな笑いの影」を浮かべていると表現され、「個」を生きられてない女性の苦悩の内面に立ち入った語り手の視点を浮上させている。

一方、一郎の悲劇は、最も親しかるべきはずの妻の魂をつかみた、いという願望に端を発するものであるのだが、それはつまり一郎が、自らの人生を生きていく過程において決定的な関わりを持つ存在として、妻（女性）を捉えているということの意味する。一郎は全霊をかけて自分と向き合うことをお直に要求する。愛する女性と全的に関わろうとするこの態度は、当時の結婚観からすると、女性を対等な他者として捉える画期的な視点であるが、一方過度に鋭敏な精神と優れた知性の持ち主である一郎が、お直に自己の存在の全てを理解してほしいと希求する時、一郎は寸毫の偽りも「技巧」をも許さず、かかる一郎の存在自身が、自己の心もお直の心も抜き差しならぬ破壊にまで追い詰めることとなるのだ。つまり一郎の苦悩は、お直という一人の女性の個性によって引き起こされるものであると同時に、お直という女性の個性の如何を問わずに現れてくる問題でもあるということだ。（注20）「自由な女」であるお直の今までの行動は「何物にも拘泥しない天真の発現」であったとみる視点は、「嫁」になった女性の本当の苦悩を知らぬ男の視線でもある。娘時代の「天真」を捨てて、「献身」と「忍耐」で懸命に歩んできた自分を「鉢植」と悲しいながら認定するお直には、「測るべからざる女性の強さ」がある。二郎はお直の態度に「あの落ち着き、あの品位、

あの寡黙、誰が評しても彼女はしつかり過ぎたものに違いなかった。驚くべく凶々しい」「(塵勞)六)ものを見てゐる。お直の忍耐、気高さ、微笑、端然たる態度は、「凶々しい」ものとして、男たちを脅かしている。ここで使われている「凶々しい」は、(はずぶとい)とか(あつかましい)とかの字義ではなく、意志の強さを表現した言葉と見てよいかと思う。

もつと、お直の評価を探ってみると、小宮豊隆は「お直は、一郎と同じレベルの上に立たうと努力しないのみならず、冷淡に構へて、一郎の世界を理解しようときへもしない。のみならずお直は、自分でいつのまにか鍛え上げた『牢乎たる個性』に従つて、一郎の思はずなどには貪著なく、自分のしたままのことをどしどし実行して行くのである」(注21)と、分析している。小宮の指摘は、一郎を中心とした男の側からのみ見たお直の評価に過ぎない。ジェンダーによつてつくられたお直は、自分の力で生きる事が出来ない辛さを意識し自分の想いを沈黙の奥に封じ込めて暮すうちに「腑抜け」「魂の抜殻」になつてしまつたのだつた。家制度下で次男という位置にばられ、そのような制度を批判的に見る視点で共通するものがあつて、二郎だけに心を開いたお直は、当時の日本を生きている女である自分は「親の手で植付けられた鉢植のようなもの」として自由に勝手に飛んで歩くことができない時代状況で「猛烈で一息な死に方がしたい」「何時でも覚悟が出来てる」という死だけがありのままの「自分の生」の証であることを二郎に語つた。また近代以前の自分を犠牲にして男や夫に献身する封建道徳のカテゴリーおよびそれを基準とした普遍的価値の内に生き甲斐を見つけようとしている女性たちに対してお直は、その当時の女性に強制された父権制の「家」に従属しなければならぬ妻を縛つた秩序に強く反発したとしてもそれを表面に出せぬ女に他ならなかつたが、にもかかわらず相対的に言えば新しきをもつて生きる女性なのである。

本研究では、お直のイメージをめぐつての単なる外観的な考察に過ぎないかも知れない。作品論においての女性の考察だけで漱石文学の女性の意味が解明されるとも言えないであろう。新しい方法論による研究は、今後の課題として『行人』を深く考察するつもりである。

注

注 1 川淵芙美「漱石文学の女性―『行人』をめぐる―」「山口女子短期大学研究報告」第24号 一九六九年 47頁

注 2 小宮豊隆「『行人』」浅田隆・戸田民子編『漱石作品論集成第九卷 行人』桜楓社 一九九一年。

注 3 瀬沼茂樹「『行人』」同右 35頁。

注 4 伊豆利彦は、主に二郎と直の間に本当の愛情が存在しているかどうかについて論じ、「恋愛成立説」を主張している。これと正反対に、重松泰雄氏は恋愛不成立説を主張している。伊豆利彦「『行人』論の前提」同右 88頁、重松泰雄「『行人』における〈二郎の愛〉」同右 112頁

注 5 三浦雅士「恋愛と家父長制『行人』ノート」『漱石研究』十五特集『行人』翰林書房 二〇〇三年 35頁

注 6 『行人』全体では「淋しい」の語は三十六回登場する。又、お直が「淋しい」と形容される九例は以下である。

① 嫂は夫でも淋しい頬に片鬢を寄せて見せた。(「兄」六)

② (前略) 嫂は例の通り淋しい鬢を寄せて(後略)(同十六)

③ すると嫂は変に淋しい笑ひ方をした。(同三十一)

④ 嫂は「(中略)」と淋しく笑ひながら上へ昇つて行つた。(同四十)

⑤ それでも彼女の若くて淋しい唇には冷やかな笑の影が(後略)(同四十四)

⑥ 嫂は何時もの通り淋しい笑ひ方をして、(後略)(「帰ってから」二)

⑦ 嫂は平生の通り淋しい秋草のやうに(中略)笑つた。(同四)

⑧ 嫂は淋しいながら笑つて呉れた。

⑨ 不断から淋しい片鱗さへ（中略）淋しさを消える瞬間にちらちらと動かしした。
（「塵勞」二）

注 7 宮坂ゆかり「夏目漱石論（二）——人から人へ掛け渡す「橋」の問題を中心に——」『新大國語』11巻 昭和60 71頁

注 8 飛鳥井雅道氏は「漱石の初期の女の描きかたは、美女を、静かなところに立たせて、男はあこがれ、ないしは「絵」として見るシーンがくりかえされている。『坊ちゃん』の「マドンナをここにたたせたら」云々も、ダッドレー夫人同様、女が肉体化していない故だとすらいえるし、『草枕』でも、那美さんは、「まぼろし」のように部屋に入ってきたり、文字どおり、木のところに「たつ」のだった。」と述べている。
飛鳥井雅道「文学」35巻12号 64頁 昭和42・12

注 9 同注 7 66頁

注 10 石原千秋『「行人」——階級のある言葉』『国文学』37・5巻 平成4 12頁

注 11 「又何か兄さんの気に障る事でも出来たんですか」
「そりやあの人の事だから何とも云へないがね。けれども夫婦となつた以上は、お前、いくら旦那が素ツ気なくしてゐるたつて、此方は女だもの。直の方から少しは機嫌の直るやうに仕向けて呉れなくつちや困るぢやないか。（後略）」（「兄」十三）
例えばこのようなどころにも、妻が進んで夫の機嫌をとらなければならぬと言ふ、主従的な夫婦関係を当然とする「家的発想が認められる。」

注 12 明治民法（明治三一年七月施行）によれば、
第七八八条①妻ハ婚姻ニ因リテ夫ノ家ニ入ル（②略）
第七八九条①妻ハ夫ト同居スル義務ヲ負フ
②夫ハ妻ヲシテ同居ヲ為サシムルコトヲ要ス
第七九九条①夫又ハ女戸主ハ用方ニ従ヒ其ノ配偶者ノ財産ノ使用及ヒ収益ヲ為ス權利ヲ有ス（②略）
第八〇一条①夫ハ妻ノ財産ヲ管理ス

などとあり、明治民法下では、妻は（夫ノ家ニ入ル）ばかりか（夫ト同居スル義務）を負わされ、財産までも管理される被支配的存在であつたことが分かる。
我妻栄編集代表『旧法令集』 昭和43・9 有斐閣

注 13 石原千秋『漱石の記号学』講談社選書メチエ 一九九九年 119頁

注 14 同注 13 190頁・192頁

注 15 小森陽一は「交通する人々」メディア小説としての『行人』（『日本の文学』第8集、有精堂、90・12）の中で、「女たちはヒトであるにもかかわらず、自己の生を自らのものとして『所有』することを拒まれている。」と指摘している。

注 16 橋川文三「市民的家族観の形成 日本的知識人の思想と家」『講座家族 8 家族観の系譜 総索引』弘文堂 昭和49・9

大正期は一般的について明治期的な家の権威が弛緩し、くずれ始めた時代とみられる。（中略）この時代における家はもはや家父長的権威を失い、庇護者であることとともに威圧者であることをも放棄しつつあつた。少なくとも、かなり急速に都市化がすすみ、早くも大衆化現象をさえあらわしつつあつた大都市での家は、いわゆる『文化住宅』に象徴されるように、小市民的消費単位としての『小さいながら楽しい』ホームへと変貌しつつあつた。と指摘がある。

注 17 同注 16

注 18 三浦雅士「恋愛と家父長制『行人』ノート」『漱石研究』15 特集『行人』翰林書房 二〇〇三年 35頁

注 19 遠藤祐「国文学」第14巻第5号 昭和41・5 101頁

注 20 荻原桂子『『行人』論——「一郎」の苦悩』『夏目漱石の作品研究』花書院 平成12・3 62頁

注 21 小宮豊隆 『夏目漱石 三』 岩波書店 昭和 28 年

参考文献目録

テキスト

漱石全集 全 18 巻 岩波書店 昭和 49 年 12 月、昭和 51 年 4 月

単行本

小宮豊隆著 『漱石の芸術』	岩波書店	昭和 17 . 12
岡崎義恵著 『漱石と微笑』	東京ライフ社	昭和 31 . 2
坂垣直子著 『漱石文学の背景』	鱒書房	昭和 31 . 7
千谷七郎著 『漱石の病跡―病氣と作品から―』	勁草書房	昭和 38 . 8
駒尺喜美著 『漱石―その自己本位と連帯と―』	八木書店	昭和 45 . 5
越智治雄著 『漱石私論』	角川書店	昭和 46 . 6
熊坂敦子著 『夏目漱石の研究』	桜楓社	昭和 48 . 3
水谷昭夫著 『漱石文芸の世界』	桜楓社	昭和 49 . 2
江藤淳著 『決定版 夏目漱石』	新潮社	昭和 49 . 11
桶谷秀昭著 『夏目漱石論』	河出書房新社	昭和 51 . 6
平岡敏夫著 『漱石序説』	塙書房	昭和 51 . 10
坂本浩著 『夏目漱石―作品の深層世界』	明治書院	昭和 54 . 4

- 三好行雄著 『鑑賞日本現代文学第五卷 夏目漱石』角川書店 昭和59・3
- 松元寛著 『夏目漱石―現代人の現像』新地書房 昭和61・6
- 佐藤泰正著 『夏目漱石論』筑摩書房 昭和61・11
- 平岡敏夫著 『漱石研究』有精堂 昭和62・9
- 秋山公男著 『漱石文学論考―後期作品の方法と構造―』桜楓社昭和62・11
- 山本勝正著 『夏目漱石文芸の研究』桜楓社 平成元・6
- 浅田隆・戸田民子編 『漱石作品論集成 第九卷 行人』桜楓社平成3・4
- 松元寛著 『漱石の実験―現代をどう生きるか』朝文社 平成5・6
- 重松泰雄著 『漱石 その歷程』桜楓社 平成6・3
- 熊坂敦子著 『夏目漱石の世界』翰林書房 平成7・8
- 安藤章二著 『私論夏目漱石―『行人』を軸として―』桜楓社平成7・11
- 石原千秋著 『反転する漱石』青土社 平成9・11
- 江藤淳著 『漱石とその時代 第五部』新潮社 平成11・12
- 荻原桂子著 『夏目漱石の作品研究』花書院 平成12・3
- 佐藤泰正著 『漱石を読む』笠間書院 平成13・4
- 水川隆夫著 『漱石と仏教―則天去私への道』平凡社 平成14・9
- 盛忍著 『漱石「行人」論』作品社 平成18・5

単行本所収論文

小宮豊隆 『行人』

- (小宮豊隆著 『漱石の芸術』 岩波書店 昭和17・12)
- 岡崎義恵 『「行人」のお直』 東京ライフ社 昭和31・2)
- (岡崎義恵著 『漱石と微笑』 東京ライフ社 昭和31・2)
- 坂垣直子 「「行人」の西欧の主題」 鱧書房 昭和31・7)
- (坂垣直子著 『漱石文学の背景』 鱧書房 昭和31・7)
- 千谷七郎 「『行人』の作品形式」 勁草書房 昭和38・8)
- (千谷七郎著 『漱石の病跡―病氣と作品から―』 勁草書房 昭和38・8)
- 千谷七郎 「『行人』の中味」 勁草書房 昭和38・8)
- (千谷七郎著 『漱石の病跡―病氣と作品から―』 勁草書房 昭和38・8)
- 駒尺喜美 「「行人」論―到着点と出発点と―」 八木書店 昭和45・5)
- (駒尺喜美著 『漱石―その自己本位と連帯と―』 八木書店 昭和45・5)
- 越智治雄 『一郎と二郎』 角川書店 昭和46・6)
- (越智治雄著 『漱石私論』 角川書店 昭和46・6)
- 熊坂敦子 「『行人』―我執の風化―」 桜楓社 昭和48・3)
- (熊坂敦子著 『夏目漱石の研究』 桜楓社 昭和48・3)
- 水谷昭夫 「『行人』の世界―その苦悩と狂気の構造について―」 桜楓社 昭和49・2)
- (水谷昭夫著 『漱石文芸の世界』 桜楓社 昭和49・2)
- 江藤淳 「「行人」―「我執」と「自己抹殺」」 新潮社 昭和49・11)
- (江藤淳著 『決定版 夏目漱石』 新潮社 昭和49・11)
- 江藤淳 「「行人」の孤独と東洋の自然観」

- (江藤淳著 『決定版 夏目漱石』 新潮社 昭和49・11)
- 江藤淳 「明治の一知識人」
- (江藤淳著 『決定版 夏目漱石』 新潮社 昭和49・11)
- 桶谷秀昭 「相對と絶對の間——『行人』」
- (桶谷秀昭著 『夏目漱石論』 河出書房新社 昭和51・6)
- 平岡敏夫 『『行人』その周辺』
- (平岡敏夫著 『漱石序説』 塙書房 昭和51・10)
- 坂本浩 「『行人』の内在的問題——墮地獄の孤独——」
- (坂本浩著 『夏目漱石——作品の深層世界』明治書院 昭和54・4)
- 三好行雄 「行人」
- (三好行雄著 『鑑賞日本現代文学第五卷 夏目漱石』角川書店昭和59・3)
- 松元寛 「『彼岸過迄』から『行人』へ」
- (松元寛著 『夏目漱石——現代人の現像』 新地書房 昭和61・6)
- 佐藤泰正 「『行人』(信)と(狂氣)のはざまに」
- (佐藤泰正著 『夏目漱石論』 筑摩書房 昭和61・11)
- 平岡敏夫 「『行人』——淋しい文学」
- (平岡敏夫著 『漱石研究』 有精堂 昭和62・9)
- 秋山公男 『行人』
- (秋山公男著 『漱石文学論考——後期作品の方法と構造——』桜楓社昭和62・11)
- 山本勝正 『『行人』論——「三つの話」にみられる一郎の思いと苦惱——』

- (山本勝正著 『夏目漱石文芸の研究』 桜楓社 平成元・6)
- 米田利昭 「男の不安、女の苦惱―『行人』」 勁草書房 平成2・8)
- (米田利昭著 『わたしの漱石』 勁草書房 平成2・8)
- 松元寛 『『彼岸過迄』から『行人』へ』 朝文社 平成5・6)
- (松元寛著 『漱石の実験―現代をどう生きるか』 朝文社 平成5・6)
- 重松泰雄 「『行人』の主題―とくに〈二郎説話〉の意味するもの―」 桜楓社 平成6・3)
- (重松泰雄著 『漱石 その歷程』 桜楓社 平成6・3)
- 熊坂敦子 「『行人』―絶対即相對」 翰林書房 平成7・8)
- (熊坂敦子著 『夏目漱石の世界』 翰林書房 平成7・8)
- 石原千秋 『階級のある言葉『行人』』 青土社 平成9・11)
- (石原千秋著 『反転する漱石』 青土社 平成9・11)
- 江藤淳 「『行人』の完結」 新潮社 平成11・12)
- (江藤淳著 『漱石とその時代 第五部』 新潮社 平成11・12)
- 荻原桂子 『『行人』論―「一郎」の苦惱』 花書院 平成12・3)
- (荻原桂子著 『夏目漱石の作品研究』 花書院 平成12・3)
- 田中実 「『整った頭』と『乱れた心』―『行人』私論―」 笠間書院 平成13・4)
- (佐藤泰正著 『漱石を読む』 笠間書院 平成13・4)
- 水川隆夫 「『行人』と『模倣と独立(死か狂気か宗教か)』」 平凡社 平成14・9)
- (水川隆夫著 『漱石と仏教―則天去私への道』 平凡社 平成14・9)

- 秋山公男 「『行人』の構想と構造——一郎・お貞の位相に関する一考察——」
- (「国語と国文学」56巻10号 東京大学国語国文学会 昭和54・10)
- 秋山公男 「『行人』の深層心理」
- (「立命館文学」439、441号 立命館大学人文学会 昭和57・3)
- 佐々木勝 「『行人』について——一郎・二郎・直の関係をめぐって——」
- (「青山語文」14号 青山学院大学日本文学会 昭和59・3)
- 文哲秀 「『行人』研究——一郎Ⅱ苦惱——」
- (「日本学報」15号 大阪大学文学部日本学研究室 昭和60・11)
- 米田利昭 「『行人』を読む」
- (「日本文学」36巻9号 日本文学協会 昭和62・9)
- 三谷憲正 「『行人』の絵模様——「三沢」と「一郎」、そして「娘さん」と「お直」——
- (稿本近代文学)10号 筑波大学文芸言語学系平岡研究室 昭和62・12)
- 須田喜代次 「『行人』論(1)——新時代と「長野家」——」
- (「大妻国文」20号 大妻女子大学国文学会 平成元年・3)
- 須田喜代次 「『行人』論(2)——「男の道德」「女の道德」——」
- (「大妻女子大学文学部紀要」21号 大妻女子大学 平成元年・3)
- 小森陽一 「交通する人々——メディア小説としての『行人』——」
- (「日本文学」8号 有精堂 平成2・12)
- 大竹雅則 「『行人』——一郎と直——」
- (「論究」)11号 帝京大学文学部国文学科 平成3・2)

- 木村功 「『行人』論——一郎・お直の形象と二郎の〈語り〉について」
 (国語と国文学) 74—2号 東京大学国語国文学会 平成9・2)
- 中山和子 「『行人』論——家族の解体から浮上するもの」
 (『漱石研究』 9号 翰林書房 平成9・11)
- 吉川仁子 「『行人』論——『あの女』のゆくえ」
 (『叙説』 31号 奈良女子大学国語国文学 平成15・12)
- 上総朋子 「夏目漱石『行人』論——『人から人へ掛け渡す橋』の可能性」
 (『日本文芸学』 41号 日本文芸学会 平成17・2)
- 上総朋子 「夏目漱石『行人』論——〈死〉〈狂〉〈宗教〉そして〈救済〉をめぐる」
 (『キリスト教文芸』 21号 「日本キリスト教文学会関西支部」平成17・3)